

日本語の個性 12

句讀法

外山清史

~~愛~~ 愛

愛を心相手を呼び出して、自分の心を乗

るとい

「わたしは〇〇です」

と言う人が多いようにある。いけんいことは

るいが、年配の人には、どこか冷たい、即ち

口上のよろに感じられる。

「こちらには〇〇です」が「心にはいます」

をう、おかやかひある。云い知るのほ、と、

に乱暴なひかをもっの言が白濁心ある。

日常の会話心も、云い知らるることばかり

い。	セニテンスをしやべる9ひはなく、7レ	5
）ズ（へい）を差へる。	コ人で話してゐるとき	10
は双方が句のやりとりをして、	掛け合ひになる	15
△	「急げ悪くして」	
B	「たいたい、あの人とはどこか愛？」	
A	「愛人ばかりいそうだがどうも……」	
セニテンスをしやべつていないというこ		
た氣のついでに	むしろ例外である。	
法的	セニテンスをしやべる9は、むしろ日	
未人	にたれしといふと云つてゐる。	

文章のま、セコトニスとフレースの區別が
あつて、そのことがあつた。

「それをどう考へるのか。問題である」

「それをつまむのか。問題である」

「どうも問題、ではない。句讀点の使ひ方

は押れといふ」

「もともと日語には句讀法といふものがあ

つた、明治になつて、外国の文章を見るに

その句讀点がついてゐる。それに徹底的に

のびぬけたあつたか、互かちか、
板にうかた

板

もつとも元祖のまゝのツパのひもをくらげ句読
法はよく、きこんとしたまのには、たのは二
名をくらげのつらびある。

作「海流抄」にはむろんのこと、江戸時代の
ひも、句読法はしつかりしてゐない。

いまひも、拍符状とか案内の正式なまの
は、息や丸をつつないの如正のひもであるが、
こしつについたものもあらゆれど、
の年統も句読法はつけるといふのが、
うへ年ひ手統を著く人ばるく、

明治の問に制定され、法律、たとえは刑罰

たの文章に何句漢語は見られる。

「泰西の何人ヲ問ハス曰吾国内ニ法テ非ラ

犯シタル者ニ之ヲ適用ス」(刑法第一條)

法律は保守的であるから、現在もこのまゝい

る文章がまゝに記されている。また、句讀法を

のまゝ問ハスを問はず、に改めることも許さ

れる。

喜

日本語にけい文句讀法を採用了たのは、

明治二十年代の、文部省の国定教科書であつた。

注意外に七

1922

の頃おとしきりて、
疎雑より進歩的だつたこと

にふるが、
普屋一般への一歩ずつとぶくれだ、

もつとと新しいことか
好きそする新聞が、こ

と句読点以ついては
むむくおくれだ。すべて

の全国紙が句読法に従う
よるんつたや、

夏敷の二十、七年む
ま、それまむはす

つと、
ま、くまむ、また、また、

のむむる、
いにして句読点のを使
れなかつた

やわかかうむりか、
むま、とするとお
おと中

おつおめと
おまむるおと
おたやかむしれな

のま

い。

戦後の学校はアメリカの影響があったのか

どうかあかろるいが、可読法を教えるのは熱

心であった、戦前には違った句讀点の扱い方

をその世代が喜んだ、加筆でも句讀法によつ

て戦後世代かのかを判定するらしい。漢字

配入の傾向が増えらるようになつたのも

句讀法が重視された。此の考へは、その長所

ひあつた。

その行き違ひの例も若い人たちに知られ

調査

書いたものの

7

源

の例

いる。年功の足不足

〇〇△△様。


くするのがある、こんな例は政米にもないか

らぬあや誤創のひある。といつて笑つていそ

れろが、大新聞が、とんどもないことをする

大正有改名のおこる大広告のキマツチフレード

「事業の拡大に！実績の××びす。」

と各録の何点をつりる  こういう場合、

点とに空物があるのだから、句点は無要、あ

つては ~~無用~~  必要無格差の「廣告」が、教訓つ

50
51
52
53
54
55

8

たことには、思案のつもりで、丸をつけた。学校
 の教員も、そこまの体件が、尾さかぬ光のが、
 さすがに、解題の出す者、~~本~~九巻には、この目
 ざありな丸のついでに、~~本~~は、~~本~~い。
 たいない、いとして、句讀点をつけるか、
 けりきりして、いまいか、誤用かおこる。も
 とともに、張本人の理解を助けるの目的で
 つけた。誤讀をさけるため、~~の~~表裏心をつけた
 のか、姉まりの真る、したかうて、目上の人人、~~是~~
 出す本、~~本~~を、句讀点を、つける、~~は~~、~~本~~の、~~本~~

10
15
20

書を疑うことにはなりのかねる ~~く~~ 失礼にるるの
ひある。

今評判の歌集、周野弘考のバガカウド歌
カキを見たと、こころ ~~ひ~~ ころ、歌中に句端
を ~~か~~ づいていり、かう目を見詰る、これ ~~ま~~ 短
詩型文字の和歌短歌、俳句、川柳を ~~通~~ 短
ことマルと ~~作~~ 無関係ひあつた。おどろいて、
作者が本人に理田をきいたところ、このころ
の若い人は相当の教養があるはずなのに、区
印りを間違えろ。そこのことかたないふりに、

句讀点をつけた、ということであつた。それ
を分るために句讀法を考へ、使用である。おこ
り、及びすき方が間違つてゐる。

現代、句讀法にも結構な動きがある。日本
語の變質と無関係ではない、むしろ思ふられる。